

## マージナルな女を／が語るということ

小松佳代子・山口真里・秋山麻実

### I. 女性・マージナリティ・語り

マージナルな者とはいったいいかなる者か。マージナルな者とは、中心から見て周縁に位置するものではある。だがそれは、社会の逸脱者（アウトサイダー）の歴史<sup>1</sup>なのだろうか。アウトサイダーというのはすでに何らかの集団的枠組みが先に想定されているからこそ、描き出されるものである。マージナルな者の歴史はそうではないのではないか。何らかの図形を描くときに、その縁取りを描くことでそうするように、マージナルな者の歴史を描くことは、そのことによって初めて、その者たちをマージナルなものたらしめている何らかの集団を描くことができるような、そういう歴史を描くことなのではないだろうか。本稿の問題関心をきわめてナイーヴな形で表明すればそういうことになる。

それにしてもなぜ、「語り」なのか、そしてなぜ「女性をめぐる」語りなのか。男性のマージナルな者をめぐる語りと何が違ってくるのか。女性史研究が「女の視点」や「女の経験」を強調したことが、「結果的に女性史を普遍史、一般史とは無関係な特殊で周縁的分野としてゲットー化してしまう危険をつねにはらんでいた」と荻野美穂は指摘している<sup>2</sup>。そのような危険をはらみつつも、ここでマージナルな女性をめぐる語りに着目するのは、そこでは既存の秩序空間が増殖していくさまが見えやすくなると考えるからである<sup>3</sup>。

また、ポストコロニアリズムは、「女」とい

う差異はナイーヴに共有されるものではなく、「女のなかの差異」を明らかにする必要を提起しているが<sup>4</sup>、マージナルな女性という視点は、女性の複数性に着目することを可能にする。本稿で扱うのは、「カテゴリーとしての他者である「女性」の内部の、さらなる他者」つまり「他者のなかの他者(the other of the other)」たる売春婦<sup>5</sup>と、レスpekタブルな女性としてカテゴライズされるにもかかわらず、中産階級女性の家庭重視イデオロギーから逸脱する危険を常にはらんでいるとみなされる、「間隙(in-betweenness)を生きる」とでも言うべきガヴァネスである<sup>6</sup>。

後に詳しく論じるように、マグダリン・ホスピタルは売春婦更正施設として、1758年にジョナス・ハンウェイによって設立された。このホスピタルの趣旨を喧伝するために繰り返し用いられるのは、「かわいそうな売春婦」という表象である。18世紀半ば以前の売春婦は、怠惰でふしだらな者と見なされ、逮捕され懲治監でむち打ちされるのが一般的な処遇であった<sup>7</sup>。それがこの時期、本来純粹無垢な女性が貧困や無知によって、あるいはだまされて売春婦へとおとしめられた「かわいそうな」存在であるがゆえに、改悛した売春婦を受け入れ、扶養しまっとうな女性に戻していくということが主題化される。ロイ・ポーターはこのような売春婦に対する態度の変化の要因を啓蒙主義の認識枠組みに見ている。そして興味深いことに、そのような啓蒙主義的認識枠組みの中で、そうした矯正

すべき人々は、「教育されるべき子ども」という見方とともに見いだされたのだとも指摘している。「子どもが教育され得るのとちょうど同じように、問題のある人々も再教育(retrained)され得るのだ」<sup>8</sup>。

「かわいそうな売春婦」という語りは、改悛している売春婦を矯正し、売春から救い出す言説のように見える。だが、そこにはある錯誤がある。ホスピタルが救おうとするのは、「すでに改悛している」売春婦であり、また矯正が容易なまだ売春をはじめてから日の浅い若い娘を対象としていた。それ以上に重要なのは、マグダリン・ホスピタルの収容者の「少なさ」が示しているように、売春婦の更正そのものを重視してはいないという点である。「かわいそうな売春婦」という語りは、売春婦を更正する主体として位置づけつつ、しかしまっとうな女性として再統合することを目指したものではない。まっとうな女性としての規範の枠組みのありかを不断に示しながら、かつて売春婦であった女性がまっとうな女性として社会の中に再統合されることは排除する。これは、ちょうどこの後の時期に貧民の子どもを教育することが社会の現状(status quo)を転覆させることが決してないようすべきだという議論がなされたのと同様に<sup>9</sup>、売春婦を救済することで社会の秩序は決して変わらないような仕組みをもった語りである。ここにおいて、まっとうな女性としての規範は何ら傷つくことなく守られる。自らの罪を告白する「かわいそうな売春婦」という表象は、当時の女性的規範のありかをむしろ指し示すものとなっているのである。

マグダリン・ホスピタルへの入所申請書には、売春婦自身の改悛と更正する意志が語られる。だがそれは「当事者の語り」と言えるだろうか？むしろそれは語りによって、マージナルな存在であることが明らかにされてしまうような、そういう語りである。ここには相変わらず「語り得ない女性」がいるだけである。だが、「語ることさえできれば」、マージナリティから抜け

出すことができるのだろうか。

マージナルな者をめぐる語りは、つねにこのように、当事者の語りと他者の語りとの落差、あるいは当事者の「語り得なさ」と他者の饒舌といった問題をはらんでいる<sup>10</sup>。「服属者（サバルタン）は語ることができるか」と問うたスピヴァクの議論もそのような文脈で言及されてきた。ヒンドゥー教徒の寡婦が死んだ夫の火葬用の薪の上に登って、我が身を犠牲に供する寡婦殉死を取り上げるスピヴァクは、植民地支配と性差別という二重の支配の下で、どのような語りによってもすくい取られないサバルタンの女性自身の意識を問題にしているかに見える。だが、デリダの英訳者でもあるスピヴァクが問題にしているのは、「語り得る／語り得ない」という二項対立では決してない。この論文の前半で執拗にフーコー、ドゥルーズ批判をしていることの意味を考えてみれば、それは容易にわかる。スピヴァクは、representation（あるいはreprésentation）という語が「代弁／代表」という意味と「再現／表象」という二重の意味をもつことに注意を促す。この一つのことばの中にある二つの意味の差異を無視し、あるいは逆用し、表象することが代表することであるとして、「パラドクシカルな主体の特権化」を行うものとして、フーコーやドゥルーズは批判されているのである。スピヴァクは、この二つの意味の差異に注目しつつ次のように述べている。「くりかえすが、両者は関連しあっている。しかし、だからといって両者をいっしょくたにしてしまうならば、それもとりのけ、両者を越えたところに抑圧された主体たちが自分で語り行為し知る場所はあるのだというようなことを言わんがために両者をいっしょくたにしてしまうならば、これはもう本質主義的なそして空想的なポリティクスに導くものでしかない」（傍点原文イタリック）<sup>11</sup>。このスピヴァクの議論は、「声の形而上学」を批判したデリダと響きあっている<sup>12</sup>。「サバルタンは語ることにはできるか」という問いは、語り得ないサバルタンたちをして語らせることへと向かうものでは決してない。

このスピヴァクの議論を大澤真幸は、自己について語ることがそもそも不可能であるという原理的問題の一環として引き取る。大澤は言う。「自己が自己について語るということは、その語りの言語行為を、自己に対して外在する他者に委託する形式において確保するということである。つまり、(自己について) 語るということは、始めから、他者に疎外された形式でのみ、与えられるのである」<sup>13</sup>。つまり、「私は～である」という語りは、「自己に潜在する「本質」を有意味なものとして指示しうる」特権的な他者(第三者の審級と大澤は名づける)に認定されて初めて可能になる。自己が自己について語るということは、本源的に不可能であるというのである。この議論に即せば、「語り得る者」とは、第三者の審級に帰属する語りが、語る者の同一性を肯定的に言及し構成するために、自らの発話として(再)固有化しているにすぎない。サバルタンであるということは、そのような(再)固有化自体が不可能であるということの意味している<sup>14</sup>。大澤は、前者を第三者の審級が発話者に対して「正立している」、後者を「逆立している」状態と述べている。

サバルタンは語ることはできない。だが、私たちはサバルタンが語り得る地点を見いだすべきなのだろうか? そのような地点を探そうというのは、知識人のノスタルジアでしかない。「みずから知っていて、語ることができ、代表(=表象)しようにも代表(=表象)しえないサバルタンの主体などといったものはそもそも存在しないのである」<sup>15</sup>。サバルタンそのものが「理念的存在」であることを指摘するスピヴァクが注意を促すのは、人民と支配集団とのあいだに位置する「地方的レベルでのエリート・サバルタン」たちである。サバルタン・スタディーズでは<間隙>(in-betweenness)に生きると見なされる、状況非決定性(situational indeterminacy)を持つ存在である。このような<間隙>に生きる者たちに着目することでしか、サバルタンの「語り」は問題にできない。大澤の議論に依拠すれば、彼らの語りは、自らに「正

立する」語りを確保しようとするものである。だが、その語りそのものが、自らの同一性を否定的に言及し構成してしまう。そのようなパラドキシカルな構造が現出するのである<sup>16</sup>。

ガヴァネスは、このような<間隙>に位置する。彼女たちは中産階級の出自でありながら、ヴィクトリア朝中産階級における家庭重視のイデオロギーから逸脱する危険性を秘めた存在と見なされる。だが家庭から疎外された存在である彼女たちは、にもかかわらず、家庭重視のイデオロギーを浸透させるエージェントとなっていく<sup>17</sup>。そのように自らの位置を自足的には決定できない、状況非決定の状態にあるがゆえにガヴァネスは、そもそもカテゴライズの欲望を喚起するのだが、それだけではない。本稿で取り上げる「ガヴァネス」と名づけられるエレン・ウィートンは膨大な日記や手紙を残している。彼女は自らについて語ること、あるいは自らが書いた手紙の写しをとるという意味で「語ることのできる」存在であった。しかし、彼女の語りは、そのままでは彼女の存在を同定し得ない。後に詳しく論じるように、それは、「かわいそうなガヴァネス」という表象のもとにカテゴライズされることではじめて、意味を持ったものとして立ち現れるのである。彼女の語りは、自らの同一性を肯定的に構成するはずのものである。しかし、「語り」として成立した途端、それは彼女を疎外するものとなる。

自らについて語ることが、他者に疎外された形式でしか与えられないというパラドクスの成立機序が、自らについて多くのことばを残したガヴァネスに着目することで見えてくる。そのような語りがまた既存の秩序構造を強化するさまも明らかになるはずである。

## II. 「かわいそうな売春婦」という表象

ポスト構造主義のジェンダー史家であるジョーン・スコットは、「女」というカテゴリーを「何も入っていないと同時にいろいろな意味がはみ出している」流動的なものにすぎないとした<sup>18</sup>。「女」という普遍的で首尾一貫した実

体的同一性など存在しないというのである。このように「女」というカテゴリーの虚構性を暴露したスコットが歴史学に求めているのは、そのカテゴリー自体の歴史的構築過程を明らかにする作業である。この意味で、前節で触れた、売春婦を「カテゴリーとしての他者である「女性」内部の、さらなる他者」とみなす、シャノン・ベルの売春婦に関する思想研究は、スコットの議論に響き合うものである。ベルは、19世紀に始まる売春婦の他者化の過程を、複数の思想家のテキストを分析することで辿り、「売春婦の身体が……固有の意味はいっさい持たず、さまざまな議論のなかでさまざまな意味を持たされている」ことを明らかにしている。一方、ポストコロニアリズムもまた、「女」が一枚岩であることを否定する。そこではひとまず、サバルタンの女性が置かれる「語り得なさ」が問題となることは、前節で述べたとおりである。とすれば、「女」のなかの「他者」については、その構築過程とともに、彼女ら自身の語りがいかにして不可能とされたのか、ということが当然問題となるであろう。

こうした観点に立って、本節で取り上げるのは、「女」というカテゴリー内部における他者である売春婦をめぐる語りである。ベルは、売春婦の他者化の過程を19世紀から始まると捉えたが、ここで検討するのは、18世紀における売春婦をめぐる動きである。見取り図を先に提示するならば、ある種の売春婦が「女」というカテゴリーにおいてマージナルな位置づけを与えられ、それにともないカテゴリー自体が再構成されるという動きである。彼女たちは、アウトサイダーから周縁者へと位置づけ直されるが、あくまでその位置は、アウトサイドではないがインサイドでもない境界線上＝周縁に留め置かれたのである。そうした位置づけには、どのような語りの力が、いかにはたらいたのだろうか。はたして彼女ら自身の語りはいかに（不）可能だったのだろうか。そして、カテゴリーとしての女性は、どのように再構成されたのだろうか。18世紀の売春婦更生施設マグダリン・ホスピタ

ル（以下MHと略す）における売春婦をめぐる語りを手がかりに探っていきたい。

#### <マグダリン・ホスピタル>

1758年にロンドンで創設されたMHは、売春婦のみを対象とし、その更生を目的としたが、それはイングランドにおいて非常に新しい試みであった。というのも、当時、イングランドにおいて売春婦の処遇といえば、治安判事に逮捕され、軽犯罪者と同じように懲治監へ連行されたのち、そこで鞭打ちや強制労働を科されるのが一般的だったからである。その新しい施設の設定に携わったのは、ロシア商会の会員ロバート・ディングレー (Robert Dingley, 1708-1781) とジョナス・ハンウェイ (Jonas Hanway, 1712-1786) であった。とくにハンウェイは、同じく18世紀半ばにつくられた捨て子養育院であるファウンドリング・ホスピタルの副院長を務め、また、身寄りのない少年たちに衣服を支給し水兵として海軍へ送り出すマリン・ソサエティを組織するなど、慈善事業に熱心に関わった人物である。その意味で、MHは、当時さかんであった慈善事業のひとつとして位置付けられる。その運営に関しても、ファウンドリング・ホスピタルなどと同じように、広く集められた寄付を資金としていた。

#### <売春婦の Authentic Narrative>

MHが施設に関する文書を集め編集した書物『マグダリン・ホスピタル小史』の中には、Authentic Narrative——「実際にあった物語」という売春婦の物語が収められている<sup>19</sup>。編者によれば、この物語は、その名が示すように、実際にMHに入所したひとりの売春婦の生涯を綴ったもので、MHが創設されて8年近くが経過した頃に書かれたらしい<sup>20</sup>。もちろん、その内容の信憑性には疑問の余地がある。むしろ編者にとっては、それが「実際にあった」かどうかよりも、MHという新しい試みの正当性を訴えることの方に主眼があっただろうことには、留意しておかねばなるまい。とはいえ、ここで

検討するのは、売春婦がどう語られたかであるので、その中身の真実性はひとまず問題とはならない。また、こうした物語自体、決して新しいものとはいえない。それまでに、犯罪者の記録という形で、古くからニューゲート・カレンダーや、18世紀に多く見られた処刑者に関する裁判記録などの瓦版が存在していた<sup>21</sup>。そして物語の形式に着目すれば、若い時期における墮落から改悛と宗教的覚醒、そして迫害死へといった殉教者列伝とも同じ構造を持っている。ただし、ここで注目するのは、売春婦をめぐる表象の内容やありかたなので、既存の物語の形式との比較にまで視野を広げることはしない。

物語は、まだMHがなかった時代に「売春婦の身に置かれた不幸な若い女たち」が避難する場所も無く悲惨な状態であったこと、そこへMHが開設されたことの回想から始まる。そして、その後8年近くが経過する中で、「あらゆる不幸の重荷を背負った多くの哀れな若い人が、彼女らの悲惨な状態から逃れるこの唯一の避難所を求めてやってきたが、神のご加護とこの慈善の後援者の多大な慰めによって、地上におけるあらゆる価値あるものへと戻されていった」<sup>22</sup>。この物語の主人公A.F.も、そのような売春婦のひとりであった。彼女は「不幸な若い女性であり、1762年12月、16歳の頃に、邪悪で恐ろしい重荷を背負ってマグダリン・ハウスに受け入れられた」。しかし、彼女は決して幼い頃から恵まれなかったわけではない。彼女の父親は「きちんとした立派な人物であり」、彼女は「愛嬌があり優美な容姿を持ち、いつも感じのよい」振る舞いをしていたので、「父のお気に入り」の娘だった。しかし、「狡猾な誘惑者」の出現が彼女の幸せな生活を変えてしまう。誘惑者が「彼女の心をつかむ術を見つける」のはたやすいことだった。彼女に「偽りの求愛と結婚」の約束をすることで、「彼女の純潔を捨てさせ、父の家から彼女を連れ出した」。「父は、狂わんばかりに激怒し、最愛の我が子を捜し求めた。そして、娘を見つけると彼女を「許し、家へ連れ戻した」。だが、誘惑者にのぼせ上がつ

ていた娘は、再び父の家をあとにしてしまう。けれど誘惑者が彼女を幸せにしてくれるはずもなく、彼女は「ほどなく誘惑者に捨てられ、全く不道德な悪の道へと追い込まれてしまった」のだった。そうして売春婦へと転落させられた彼女は、ある日、父と不意の再会をし、それを機に元の正しい生活に戻ることを強く願うようになる。彼女はMHへの入所を申請して、すぐに受け入れられた。そこで、彼女は、慎み深く節度を保ち、賞賛に値する振る舞いで3年過ごす。やがて彼女の父はそのことを知って彼女を許し再び家へと迎え入れる。父は「彼女の幸せを強く願い、娘のために、金持ちの名士の家で家事奉公の仕事をすぐに見つけてやった」。しかし、それもつかの間、彼女は、足に怪我をして壊疽にかかり、それがもとで死んでしまうのだった。

#### <A.F.にみられる売春婦の表象—犠牲者としての売春婦>

ここで、主人公A.F.は、自らの性向ゆえに売春婦になったわけではない。古い理念においては、すべての女性は心の底では放蕩者であり、男性よりも強く制御しがたい性欲をもつとされていた。しかし、彼女が売春婦に転落したのは、「狡猾な誘惑者」の罠におちいってしまったからである。たしかに騙されるのは本人にも非があるともいえよう。しかし、ディングレーが売春婦の救済を呼びかけた際に述べているように、彼女たちは、「罠に取り囲まれ、それは、狡猾で熱心なものであり、能力のまさった、教育と財産において優越した者が仕掛けたもの」だから、「若く思慮のない娘たち」の「どんな美德もそのような恐ろしい誘惑者に耐えうるはずがない」のである。そして「いったん罠にかかるやいなや、輝かしい夢は消えうせる。誘惑者に捨てられ、親しい人にも見放され、世間から軽蔑され、彼女らは、貧しさと絶望と蔑みとの戦いに、さらには罪惡の深みに堕ちることへの抗いに、ひとりぼっちで取り残された末、病氣と困窮で悲惨な人生をとじてしまう」のだ<sup>23</sup>。

彼女らは、犠牲者であり、真の罪は「狡猾な誘惑者」へと帰せられる。このような「犠牲者としての売春婦」像は、「淑徳の娼婦」といわれる売春婦の表象と重なる。フランスにおいては、「淑徳の娼婦」は、1760年頃に新興の感傷小説から生み出されたといわれる。「淑徳の娼婦」は、本質的に善良で無垢な心の持ち主であり、時代的に先行する「リベルタン売春婦」とまったくの対照をなすものである。そして、後の時代まで生き残ったのは「淑徳の娼婦」像のほうであった<sup>24</sup>。

「犠牲者としての売春婦」として本人の無罪性を強調されたのは、A.F.のようにしっかりとした家柄の娘たちに限ったことではなかった。MH 設立者のハンウェイは自らの著作の中で、治安判事ジョン・フィールディングの次のような文章を引用している。

この街には、多数の椅子駕籠かきや、運び屋や、労働者や、飲んだくれの職人がいる。こういう人たちは概して子沢山で、親の働きでは彼らを養うことさえままならず、まして教育を受けさせることなどできるはずもない。しかも父親は大酒がたたって往々にして早死にするので、無力な子どもたちを抱えて取り残された母親は、彼女の稼ぎで家族を食べさせなければならない。[中略]こういう女たちの娘が何になるかは明らかであろう。貧乏と無学が相まって彼女たちをあらゆる誘惑に晒しているのではないだろうか？彼女たちは、自分の身を落とすのに情欲がいくらかでも役割を演じるに至るまでもなく、早くから必要に迫られて売春婦になることが多いのだ<sup>25</sup>。

貧しい家の娘たちが売春婦へと身を落とすのは、親がその貧しさから子どもたちを養い教育を施す余裕がなく、仕方がないことなのである。それゆえ彼女たち自身に罪は無い。「こういうかわいそうな子どもたちの中に、自らの悪徳で売春婦になったと言えるものが一人でもいるだ

ろうか？答えは否である。彼女たちは年若く、守ってくれる者もない、か弱い女であるために、女衞や道楽者の餌食になるのだ」<sup>26</sup>。貧しい家の娘たちは、女性ゆえのか弱さや無学に加え、守ってくれるはずの親さえ当てにならない窮状から、必要に迫られて売春婦となる。ここでも、売春婦は犠牲者として表象されている。

このように、MH の後援者たちは、救済の対象となる売春婦たちが、彼女らにその罪を帰すことのできない者たちであることを強調した。売春婦は性欲の過剰ゆえでなく、脆弱さゆえに売春婦にさせられたのだ。貧民の娘たちは、親やその貧しさによって売春へと追いやられてしまし、しっかりした親を持つ娘ですら、狡猾な男たちに騙されて売春婦へと堕ちてしまう。その意味で、売春が、特別な女たちでなく、誰もが犯す可能性をもつ罪とされる。MH の推進者たちは、このように、彼女たちを「犠牲者」として表象することによって、売春婦を「まっとうな人々」と全く無縁ではなく、なんらかの関係を持つ者たちであることを示したのである。

しかし、だからといって、彼女たちがまったく「まっとうな人々」とされたという訳ではない。それは、MH チャペル内での礼拝と MH への入所申請における売春婦をめぐる語りに注目することで見えてくる。

#### <チャペルにおける売春婦の沈黙>

MH が持つチャペルで行われた礼拝は、当時、非常に人気を博し、ジョージ三世の弟にあたるプリンス・エドワード公爵をはじめ、多くの人々が詰めかけた。その人気の要因は、出席者たちに感銘を与えたウィリアム・ドッド牧師の説教と、礼拝に出席している入所者たちへの好奇心だったといわれている。「改悛者〔入所者〕は、彼女たち自身、主要な呼び物だったのである」<sup>27</sup>。

ドッド牧師は、「実際にあった物語」と同様、MH に入所してくるまで、売春婦たちがどんなに過酷で悲惨な生活を強いられてきたかを情熱的に訴えた。——彼女たちは、貧しさから、ま

た、男の甘言によって売春の道へと足を踏み込んでしまったのだ。彼女たちは、抗おうにも、その非力ではどうすることもできない。もはや過酷な運命に身を任せるしかないと思われた彼女らであったが、そこへ心優しくもMHの救いの手が差し伸べられる。そしてMHは、彼女らを正しい道へと、また父のもとへと導き戻したのだった<sup>28</sup>。——ドッド牧師は、その説教を非常に情熱的に語り、礼拝に集まった人々は皆感動し、涙を流して聴き入ったという。

とはいえ、雄弁なドッド牧師にひきかえ、礼拝において、売春婦たちが声を発し語る機会はなかった。彼女たちは、地味なユニフォームを着て目深に帽子をかぶり、チャペルへやってきた礼拝者たちから離れた敷席に座った。売春婦たちは、牧師が語る売春婦の物語を、ただ黙して聴くことしかできない。しかもその席には、格子が張りめぐらされていた。それは、売春婦たちと一般の出席者たちとを隔てる壁として、彼女たちを一般の集団へと招き入れることをしない力として機能する。傍らで、ドッド牧師が、売春婦の彼女らにいかにも罪が無く、いかにも彼女らがかわいそうな犠牲者であるかを一般出席者に訴え、彼らが感涙に咽びながらその説教を聴いていたとしても、である。

#### <入所申請書における売春婦の語りの（不）可能性>

MHへの入所には、理事との面接と入所申請書の提出が求められた。その申請書は次のような文が記されている。

申請者は売春の罪を犯しました。そして、深い苦悩へと追い込み、誠実な暮らしをする手段をすべて失わせてしまった、その罪を真に理解しています。申請者は、それゆえ、この館に受け入れられることを謙虚に請うものです。そして、慎み深く秩序正しく振舞うことを、心から約束します。そしてこの館の全ての規則に従います<sup>29</sup>。

この申請書によって示されるのは、申請者が売春の罪を犯したという自覚と、心を入れ替え生活していく意思である。入所を希望する者はそこへサインしなければならない。すなわち、MHの救済を受ける為には、罪を犯したことを認め、自らを断罪することが強要されるのだ。しかし、MHの後援者たちは、売春婦の無罪性を強調したのではなかったか。彼女らは罪が無いにもかかわらず悲惨な状況に追い込まれた「かわいそうな売春婦」だからこそ、救済に値するとみなされたはずではなかったか。この矛盾は、どのように考えればよいのだろうか。

たしかに、売春婦の語りが残され得たのは、この入所申請によってのみである。彼女らが、そこに自らの名前を書き込むとき、そこに記されたことばは、彼女たちのものとなる。MHに受け入れられる売春婦は、改悛することではじめてことばを持ったともいえる。——自らの罪を指し示すことによってのみ獲得できる語り。しかし、そのことばは、申請書自体が定型文書だったことを挙げるまでもなく、自らのことばではなく、あくまで他者のことばでしかない。すなわち、売春婦たちは他者のことばによってしか自らを指し示しえないのだ。さらにいえば、申請書にあるように罪深き者にせよ、改悛の意思を持つ者にせよ、MH後援者が同情した貧しく邪悪な親を持つ子どもたちにせよ、Authentic Narrativeで語られた狡猾な男たちの犠牲者にせよ、売春婦のさまざまな表象の中でしか彼女たちは自らの存在を確立することができない。その表象から外れた途端、たとえば、入所申請に書かれた罪深き売春婦像を拒絶した途端、彼女たちは存在を奪われてしまうのである。

入所申請書や礼拝での扱いから明らかにされるのは、彼女たちが、確かに「罪を犯した」ことであった。それゆえ、彼女たちは、「まっとうな人々」とはとてもいえない。しかし、かといって完全なアウトサイダーともいえない存在、すなわち周縁に位置する者として配置される。

彼女たちをめぐる語りにおいては、つねに、

なぜ彼女たちが売春婦になったのかが述べられ、なぜ彼女たちが「まっとうな人々」とはいえないかという事情が語られる。そうして、そのようなことをしないことによってのみ「まっとうな人々」でいられるのだ、ということが読者や聴者たちへと伝えられる。つまり、彼女たち周縁者について語ることで、「まっとうな人々」の規範の外延が示されるのである。

このように、周縁へと置かれた売春婦は、不断に規範のありかを示そうとする欲望のなかで立ち現れる。売春婦は、そうした表象の欲望を喚起してしまうのであり、さまざまな表象の力を加えられてしまう存在なのである。とすれば、矛盾しているかにみえる語りも、さまざまな表象のひとつであり、そうした矛盾しささえするさまざまな表象を、売春婦はその周縁性ゆえに呼び込んでしまったということではなからうか。そして、ひとつ付言すれば、売春婦をめぐる語りは、一見対立するかに見える、かつての性欲の過剰であろうと、置かれた窮状（「罪無き犠牲者」）であろうと、つまり自身の罪であれ自身の外側にある罪であれ、もっぱら売春婦となる原因を突き止めようとするような構えである限り、売春を好ましからざるものとする社会的枠組みのもとでは、結局は売春婦を抑圧する方向へと向けられるものでしかないのである。

それゆえ、売春婦の無罪性を訴えるという一見、社会の規範秩序を組替えるような語りは、実はその既存の秩序（status quo）を変えない、むしろ鮮明にし強化するような言説である。そのことは、売春婦を救済することを掲げる MH が、財政的な問題があったにしろ、わずか100人しか収容していなかったことや、入所する売春婦に年齢制限や健康（性病）検査を課し、実質的には売春に染まりきっていない娘たちを収容していたことによって裏付けられる。そしてまた、この矛盾した表象は、ひとつの地平において統合され得る。入所者の更生可能性という基盤である。売春婦は確かに罪を犯したが、ただしそれは彼女たちの責任ではなく、更生する可能性を持つことが MH の存在を支えている。

そしてその更生可能性を担保するのが、年齢制限や入所者の健康なのである。

ここまで、MH の周辺における語りによって、「かわいそうな売春婦」をはじめとした売春婦表象がどのように構築されたか、そしてそれが女性というカテゴリーのなかでいかなる位置を占めたのかということを検討してきた。ただ、蛇足であることを承知で確認しておきたいのは、構築された売春婦表象は、観念として単に宙に浮いている訳ではないということである。それは、売春婦へと還流していく。すなわち、MH へ入所するという選択によって、売春婦は、自らが何者かということを語ることばを奪われたまま、他者のことばで語られた売春婦像を引き受けてしまっている。礼拝に参列する、黙して語らない売春婦たちもまた、売春婦像をその身にまとい人々の前にたち現れてしまっている。そして、それによって、売春婦の Authentic Narrative の authenticity は、確保されていくのである。

### Ⅲ. 「かわいそうなガヴァネス」という表象

MH への「申請者」は、売春婦をめぐる一連の対策のなかで、ある役割を負っている。それは、罪の自覚と改悛、救済を受けようとする意思を示す役割である。売春婦についての様々な語りのなかで、彼女たち自身を主語としたことばとして残されているのは、MH への申請書のみであった。ここで着目すべきことは、この申請書が、すでに決められた文書にサインする形式であったこと、そして、彼女たちのことばとしては、「申請者」という主語によって始まる文書のみが残されたということである。彼女たちは、この「申請者」と名乗ることによってのみ、何事かを語る主体として認識され得た。「申請者」という名前は、自らの罪を認め、改悛し、救済を求めるという身振りそのものである。売春婦とは、あるはずのない存在であり、この身振りを示す場合にのみ、存在を認められ、聞き取られ、記録として残された。彼女たちが他者の表象空間に立ち現れること、それはすなわち、



彼女たちが主体として認められることであるが、これは「第三者の審級に帰属する語り」におけるある役割、ある名前を負う限りにおいてしかありえない。彼女たちのあり方は、サインを入れるだけの、すでに決められたフォーマットによって、明らかに既定されていた。

救済は、彼女たちが自ら罪を指し示すことを前提としている。罪への指示と、改悛、救済の希望を持つ存在となることを宣言する「申請者」という名前は、彼女たちの存在を可視化した。けれども、それは今日、そうした可視化そのものを指し示す。彼女たちをめぐって起こる動き、すなわち、否定と救済、主体化、マージナルなあり方として彼女たちを位置づけること、それを通して、「女性」を客体化することといった動きのすべてを、それは指し示すのである。彼女たちの残したことばは、そうした動きにより彼女たちが被った言説的暴力を指し示す身振りである。彼女たちは、ことばを奪われ、あるあり方においてしか認められないばかりでなく、そうした暴力そのものを説明することもない。しかしそうした暴力があったことを、彼女たちの呼び名は証言する。この意味において、その証言はトラウマの証言と同様のものである<sup>30</sup>。

「申請者」という主語は、第三者の審級において、売春婦という存在形態が「逆立している」ということを示している。同時にその呼び名は、それ自体、彼女たちが被る痛みについての証言となり得る。しかしこの証言は、彼女たちの思いや体験の性格、彼女たちをめぐる動きの何たるかを説明することはない。彼女たちの存在が第三者の審級において「逆立」しているがゆえに、彼女たちは、自分のことばを奪われており、自分のことを自分で語る主体として認められることはない。彼女たちがマージナルな存在であったこと、それは語ることが本質的に不可能であったことと同値である。

それでは、語ることばを持つ女たち、自由に文字を操り、書きとめ、説明する女たちは、自らの被る暴力や痛みについて、十全に語ることができるのだろうか。

本節で着目するのは、手紙を書き、日記を書く19世紀初頭のみドルクラス女性である。より正確にいえば、彼女の呼び名は「ガヴァネス」、教える女性である。ここで検証するのは、彼女をめぐる語りは、彼女をどのように構成するかということ、彼女は、語ることばを奪われているのか否か、もし奪われているとすれば、それはどのような形においてなのかということである。そして、彼女の語りは、どのような証言であるのかということが、これらの問いを通じて問題とされる。

売春婦による証言のあり方と比較しつつ、推測される結論から先に述べておこう。

第一に、ことばを持つ者は雄弁である。彼女たちは、ことばを操り、自らについて語ることができる。そのため、彼女たちは、自らを否定的に表すような呼び名を用いようとはしない。だから、彼女たちの痛みは、前節で見てきたような、その内容について話すことができないトラウマを指し示す身振りとはことばで表わされるのではない。彼女たちは、自分の被った痛みについて、説明することができる。

第二に、彼女たちが存在自体を否定されているわけではないということによって、上述のようなかたちでの証言の成立が阻まれると考えられる。彼女たちのことばが奪われていないのと同様に、彼女たちは存在しないものとして扱われるのではなく、その振る舞いやことばは、他者に受け止められ、返される可能性を持つ。だから、彼女たちが自らについて語ることばは、他者によることばを次に生み出す。それはしかし、多くの場合、彼女たち自身が語ったことばではなく、語られない記憶を取り戻すために返されることばでもない。異なることばや、あるいは同じことばを使いながら、彼女たちの存在の意味は変容させられ、また時には過剰に付与されていく。そのとき、一見成立したかのように見える彼女たちの痛みの説明は、第三者の審級へと回収され、痛み自体を表現することは、やはり不可能である。

第三に、彼女たちについて語られるそうした

ことばは、過剰な意味付与によって、彼女たちを他と分節化する。彼女たちをめぐって起こる問題は、彼女たちの名前（ここでは「ガヴァネス」）で呼ばれる者たちのあり方によって起こる、その者たちに限定された問題であるかのように捉えられてしまい、その範疇の外にも広がる問題は、無視され、矮小化されてしまう。

私がこれから検証しようとしているのは、19世紀初期にイングランド北西部の田舎で手紙と日記を書き、それを保存していた「ガヴァネス」（女性教師）についての、そうした言説のはたらきである。彼女の手紙と日記、自伝の束から、彼女はどのように立ち現されたのか。そして、その反面、いやそのことによって、隠されてしまったものは何なのか。結論のヒントとなったことばを最初に引用しておきたい。

「ガヴァネスの問題は、中産階級女性の問題そのものであった」<sup>31</sup>。

#### <手紙のノート>

『あるガヴァネス、ウィートン嬢の日記』<sup>32</sup>は、Edward Hallによって編集され、1936年に第一巻、1939年に第二巻が出版された。内容は、Ellen Weeton(1776-1849)が書いた回想と、日記、そして本人が差し出した手紙のコピーによって構成されている。そのほとんどは手紙であるが、エレン・ウィートン自身が手紙を書き写し、ジャーナルとして編纂していたため、『日記 (Journal)』という題名が付けられた。

エレンが編纂した手紙類は、全部で9冊あり、遺言によって、彼女の教会の牧師ウィリアム・マーシャルに贈られた<sup>33</sup>。彼女が、差し出す手紙を書き写して保存するようになったのは、1805年からのようであるが、現存するのはこのうち第二、第三、第五、第七冊目の4冊であり、ホールによって回想録と第二、第三冊目が第一巻として、まとまった量の日記と第五、第七冊目が第二巻としてまとめられて出版された。ホールは、同じ内容の繰り返しや、事務的な手紙、感情が高ぶって神へ祈るような調子の部分を削除し、また本のレビューなどをいくつか削

除している。第一巻では、手紙の雑多な内容が、ある程度そのまま読めるようになっている。しかし、後にみるように第二巻では、エレンの人生を物語として読みやすくなるように、ホール自身のことばで彼女の身に何が起こったかを述べながら、その証拠として手紙を引用している。その日付などは省略されており、とりわけ彼女の結婚生活と離婚については、そうした形で描かれている。

#### <エレン・ウィートンの略歴>

エレン・ネリー・ウィートンは、1776年のクリスマスに、奴隷貿易船の船長であった父と、肉屋の娘であった母との間に生まれた。彼女は5歳のとき父を亡くすが、そのとき母親は、遺産を十分に受け取ることができなかったため、自分でアプホランドにデйм・スクールを開き、エレンとその弟トーマスを育てた。エレンが21歳のときに母親が死に、彼女は母親の学校を継いで教えながら、弟がアトニー（下級弁護士）になるまでの学費を稼いだ。その間、彼女は非常に貧しく、食べるものにも事欠く生活をしたと、彼女は後に書いている<sup>34</sup>。彼女がガヴァネスとして働いていたのは、最初に学校の経営を始めてからの11年間と、銀行家ペダー氏の妻と娘を教えた1809年末から1811年までの2年間、そして毛織物業者アーミテッジ氏の6人の子どもを世話した1812年から1814年までの約3年間である。もし「ガヴァネス」という単語を女性家庭教師として限定して捉えるならば、彼女がガヴァネスとして働いていたのは、ほんの5年あまりということになる。

1814年、37歳でエレンが家庭教師をやめたのは、結婚するためであった。彼女の夫の名はアロン・ストックといい、綿紡績工場を営んでいた。結婚当時、夫の工場は破産寸前であり、エレンの収入が夫の財産となることによって、破産をまぬがれたものと考えられている。ちなみにホールは、彼女の収入を、貯金約100ポンドの利子と、ガヴァネスとして家庭に入る前に貸家にする目的で購入したコテージから得られ

る収入とで、年75ポンド程度だっただろうと見積もっている<sup>35</sup>。

アーロンは、やがて妻を精神的にも身体的にも虐待するようになった。暴力を振るうのはもちろんのこと、外出を制限したり、あるいは家から閉め出すこともあり、最終的に1822年、離婚に至ったが、その際も彼女は、娘には年に3回しか会わないこと、夫が住んでいるウィガンの町には立ち入らないこと、といった約束にサインさせられている。こうした一連の不利益な約束に一役買ったのは、ほかならぬ実の弟のトーマスであった。

離婚の後、彼女はウィガンの近くの村に住んで、密かに娘との面会を試みたことなどを克明に記している。また一方でロンドンへの旅行などもしているが、1824年には再び娘と住めるようになり、1849年に腸チフスで亡くなったときにも、娘夫婦と一緒に住んでいたものと考えられている<sup>36</sup>。

#### <ノートと編集>

ごく簡単に描き出されるこのようなエレンの人生は、彼女の手紙の他に、「回想」として書かれたものによって明らかになっている<sup>37</sup>。エレンは自分が書いた手紙や「回想」、日記を読みやすい字できちんと清書していた。縦20センチ程度、横18センチ程度の小さなノートに、自ら罫線を引き、ほぼ一定の筆跡で、鉄製のペンで一部の隙もなく書き込んでいる。そのノートの第二、第三冊目から、ホールは、「回想」と手紙、多少の手紙と本のレビューが入った第一巻を編集し、1936年に出版した。彼は、コマやピリオドの位置を調整したり、繰り返しや祈りのことば、短い挨拶などを削除したり、事務的な手紙や本のレビューをいくつか削除したりはしているが、ノートの順番に沿って、日付もエレンが入れていたまま、編集している。彼の編集は、ほぼ忠実に、エレンのノートを世に出すことを意図していたといえる。そこには、中産階級女性同士の社交や、面白い話の交換、散歩など、ある女性のさまざまな日常が描き出さ

れている<sup>38</sup>。しかし、そのようにノートに忠実でありながらも、というよりはむしろ、忠実であろうとしたことからこそ、ホールは、エレンのイメージをあるガヴァネス像へと収斂させることに貢献してしまっている。

ホールは、時折エレンを、気難しく、生真面目なガヴァネスとして性格づけた。

エレンは、「回想」において、自分が女性であるために被った不利益や、周囲の人々の不親切や悪意、自分がいかに母親への愛情を持っていたかということ、しかし母親の配慮が実は弟へと向かっていったこと、弟がどんなにひどい裏切り者であるかということなどについて触れている。それらは、彼女が自身について考え、自身の物語を紡いでいくことばである。ここにおいて、彼女は、自分について語ることばを持っているし、自分の痛みについて説明している。

しかし、彼女の怒りや痛みの説明は、第三者の審級において正当化されるわけではない。彼女が怒りと痛みについて話し、解決したのではなく、書くしかなかったということそのものが、彼女のことばが奪われていたということを示している。

彼女に何が起こったかは、後の時代のホールにも、私たち読者にもわからない。彼女の性格が激しく、周囲と衝突しやすかったのか、周囲が本当に理不尽だったのか、私たちにはわからないままである。にもかかわらずホールは、彼女の激しい怒りや痛みのことばを、独りで思いを書き付けることしかできなかった、孤独な気難しいガヴァネスのことばとして、解釈してしまった。彼は、彼女の「偏狭さ」や、「几帳面さ」が彼女の社交の幅を狭めたのだと書いている<sup>39</sup>。書くという行為は、彼女のことばを伝えるどころか、それ自体、エレンが「普通の」中産階級女性ではないことを示す要素となってしまう、彼女は「偏狭」で「几帳面」な、普通でない女性として想像されてしまったのである。

しかし、ホールは、すべてのトラブルをエレンの性格に帰しているわけではない。彼は、彼女の結婚と離婚にまつわって書かれた怒りと悲

しみのことばを文字通り受け止め、何か理不尽なことが彼女に降りかかっていたと判断している。1939年に出版された第二巻は、エレンのノートの第五、第七冊目を元にして編集された。このなかで、エレンの結婚と離婚に関する部分は、ホールが自分のことばで物語を紡ぎながら、その証拠を差し挟むといったかたちでエレンの手紙を引用している。残念ながら現在、筆者は第五冊目の所在を知らず、その部分がどのように編集されたのかということについて、未だ詳細がわからない段階にあるが、いずれにせよ、結婚と離婚の時期に書かれたはずであるノートの第五冊目に入っていた手紙の多くは、日付も、他にどんな話題と一緒に書かれていたかも、ときには誰にあてた手紙かもわからない形で、ホールの編集した本のなかに収録されてしまっているのである。

ホールの編集の仕方が、なぜ、そのように変化したのかは、現在知る由もない。ノートの発見から15年経過するうちに、エレンに関する調査が進み、ある女性の人生の物語がより明確になっていったということもあるかもしれないし、またおそらく、暴力的な夫に出会い、合法的に財産を奪われ、結婚生活が8年しか続かずに、不利な条件で、とりわけ娘に会えないという母性を剥奪された形で離婚することになった彼女の人生が、ドラマティックであり、物語としての面白さを持っていたからかもしれない。

いずれにせよここでは、エレンが受けたと記した虐待が、彼女の思い込みを含んでいたかもしれない可能性や、何をきっかけにアaronがエレンに辛く当たるようになったのかといったことがらは謎に包まれたままである。そして彼女は、幸せになれるはずだった結婚における、悲劇と権利剥奪のヒロインにされてしまう<sup>40</sup>。

ところで、ホールは彼女を「ミス・ウィートン」、「ガヴァネス」と呼んだ。ノートが書かれた期間内に限ってみれば、エレンは、三分の一は結婚しており、6年余りしか学校教師と家庭教師をしていなかった。にもかかわらず、彼女はそのタイトルにおいて独身であり、ガヴァネ

スである。彼女の人生の悲劇的でドラマティックなストーリーが、結婚と離婚にまつわることであるにもかかわらず、彼女の名前は、「ガヴァネス」であることは、この名前が惨めさと分かちがたく結びついていたこと、あるいは後に見るように、この本への書評が、この結びつきを強化していったことと無関係ではない。

以上のことから、ホールの編集とエレンのイメージについて、次のことがいえる。すなわち、エレンのノートにたいしてほぼ忠実であろうとしたホールによる編集においてすら、エレンは、几帳面で偏狭で孤独な、結婚しても幸せになることができなかった「ガヴァネス」として位置づけられてしまった。そして、こうした傾向は後にみるように、この本が世に出るとさらに大きくなり、エレンは、ステレオタイプのガヴァネス像に押し込められていく。

#### <かわいそうなガヴァネス>

ホールの描き出したガヴァネス像が、気難しく孤独で、不幸なものであったとしても、その編書は依然、エレンの生活の多様性を描き出すものである。しかし、ガヴァネスに関する本としてこの編書が紹介されるときには、彼女の一生は、さらに短い、象徴的なことばに置き換えられることになる。1936年および1939年以降に出された書評を、ホールは丹念に集めていた<sup>41</sup>。ここではそれらの書評のなかで、エレンがどのように描き出されていったかという点に着目しつつ、エレンの生涯が、あらかじめ構築されているガヴァネス像へと回収されていく様子を検討したい。

「かわいそうなネリー・ウィートンのようなガヴァネス、なんというぴったりした形容句だろう！」ジョン・ヘイワードの書いた書評は、この一文で始まっている<sup>42</sup>。書評の中に現れるエレンは、かわいそうなガヴァネス、貧しいガヴァネスであるか、あるいは類まれな文才を持つガヴァネス、独りで旅行に出掛け、旅行記を残したガヴァネス、といった表現であふれている。たとえば、彼女の旅行記に着目した記事で

は、挿絵として黒い長いドレスに身をつつんだ瘦せた女性が、スノウドンの山頂に立っている絵が描かれており、あるガヴァネスが登山をしたことが小見出しで書かれている<sup>43</sup>。しかし、実際には、彼女がスノウドンに登ったのはガヴァネスをしていた時期ではなく、初老にさしかかってからである。

エレンが人生の一時期を貧しく暮らしたのは、本人がそう証言している。しかし、彼女が「かわいそうなガヴァネス」「貧しいガヴァネス」であったかどうかは疑わしい。なぜなら、彼女は家庭教師の仕事に就く前に、コテージを買って他人に貸し、年に57ポンドの収入を得る算段をしているし、上述のように、結婚する前には、その財産をあてにされる程度のものを持っていたからである。彼女は、貧しいガヴァネスだから、不幸な結婚という道しか選択できなかった、というわけではない。彼女は自分で生きていけるだけの財産を持っていたのだ。彼女の結婚が不幸だったとすれば、それはガヴァネスとしての「かわいそうな」立場ではなく、当時のミドルクラス女性すべてに降りかかるかもしれない不幸なのである。なぜなら、暴力を振るわれたり、財産が夫のものになってしまうという危険は、当時の全ての女性たちの身に起こりえたのだから。にもかかわらず、こうした書評において起こったことは、ミドルクラス女性全体の問題を、運悪く自ら稼がなければならなくなったガヴァネスという女性たちの範疇へと限定することであり、それによって問題の所在をずらしてしまう、ということであった。

エレンの文才についても、誇張が見られる。彼女は本などほとんど持っていなかったのに、近代的で決まり文句など使わない表現で手紙を書いている、とした書評があるが<sup>44</sup>、彼女は実際には本を読み、その書評を書いている。彼女がどのくらい本を所有していたかはたしかにわからないが、本を読む生活自体から切り離されていたなどと考えるのは、論外なのである。

このように、エレンの生涯は、ガヴァネスということばに集約されるばかりでなく、そのた

めに、貧しく、孤独で、不幸な女性として描かれていく。彼女の生活にあった、ミドルクラス女性らしい社交的な些事や日常的な楽しみなどは、ほとんど着目されることはない。彼女は、既存のガヴァネスのイメージに符合する言説を呼び込む。あるいはむしろ、そのような形においてのみ、彼女は存在を認められるのである。

エレンがガヴァネスであり、貧しく気難しい女性であること、そしてそのような女性が辿る道が、たとえ結婚できたとしても婚期が遅く、不幸であるということを誇張することは、彼女が実は他のミドルクラス女性と同様に生活していた部分もあることを隠蔽するだけでなく、他のミドルクラス女性が彼女と同様に不幸な結婚をしたり、不安定な生活や孤独な時間を過ごす可能性があったことをも隠蔽していったといえる。なぜなら、彼女の結婚生活の不幸までもが、彼女がガヴァネスであったことと結び付けられるということは、あたかもガヴァネスにならずに済んだミドルクラス女性は、幸福な生活が手に入るかのように想定されるということだからである。

ミドルクラスに属するガヴァネスは、ことばを使い、自らの不幸や痛みを説明することができる。自らについて語る彼女たちは、あたかも語る主体として成立しているかのようにすらみえる<sup>45</sup>。しかし、彼女の書くという行為は、それ自体、彼女の声が同時代の人々に伝えられなかったことを示している。たしかに、手紙は相手へと届いたであろうけれども、回想や日記は、彼女だけのものだった。手紙の書き写しも含めて、彼女はノートを他人に見られることを嫌がった。それは、彼女が日常の暮らしのなかで、語る主体として立ち現れることができなかったということ、そういうあり方を認められなかったということを示している。彼女は、書いた手紙を後から読み直すという個人的な楽しみのために書く、あるいは「娘に伝えたい」というささやかな願いのために書く<sup>46</sup>、というあり方でしか、立ち現れるはずのない女だったのだ。

彼女のノートは、彼女の案に反して、後に出

版された。しかし、そのとき彼女の語ることばは、別のことばに引き取られ、あるイメージのなかへと回収されていく。彼女が自分自身をそう呼ぶ以上に、読者は彼女をガヴァネスという立場へと囲い込み、その意味の範囲内で解釈しようとする。書評に見られる、彼女が貧しく、文才があり、結婚を望み、結婚に失敗した、不幸なガヴァネスであったという言い回しは、当時のミドルクラス女性の基準から逸脱を繰り返すガヴァネスのイメージのなかに、彼女の生涯が意味づけられていったことを示している。彼女を「ガヴァネス」として位置づけるこうした一連の動きのなかで、自らを語ることばを持つはずであった「間隙を生きる」者たる女性教師もまた、そのことばを奪われ、自らについて語り得ない。彼女は表象の欲望のなかでしか、立ち現れ得ないのである。

#### Ⅳ まとめにかえて

「マージナルな女たち」とは誰か。18世紀イギリスの売春婦と19世紀のガヴァネスについて、同時に論じる意味は、どこにあるのか。なぜ私たちは、「女」を問題にするのか。筆者たちは、執筆過程で何度もこうした問題に突き当たった。本稿執筆中、これらは大きな検討課題となった。一応の結論を得たと思っても、また次回で考え直すということも度々であった。つまり私たちにとって、自分たちがどのような結論に向かうのかということが、執筆開始当時必ずしも明確でなかったのだ。

問題は、私たちが、語るという行為とそれをめぐる力とを、どのように捉えるかということについて、当初明確な共通理解をもてなかったというところにあった。語ることが不可能であるとは、どのような状況を指すのか、その状況は誰が作り出すのか（あるいはこの問いはすでに無効かもしれない）。こうした問いを考えていく途上で私たちが問題にしてきたのは、言説の暴力、表象の欲望、差異化のメカニズムであった。

自らについて語ることは、第三者の審級に認

定されて初めて可能となる。主語は、自由に語り得る主体を想定しているのであるが、その語りはこの認定の範囲内においてのみ述部となり得る。売春婦対策において、売春婦達は、自らについて自由に語ることばを持たなかった。MHへの申請書のブランク・フォーマットは、自由な自己言及の不可能性を端的に示している。一方、あるガヴァネスの日記と手紙は、一見自由な自己言及の可能性を表すかのようなのだが、その出版後の書評において、彼女の人生は、「かわいそうなガヴァネス」の物語へと回収されてしまう。自らについて語るということは、可能性としては常に想定されているけれども、実は第三者の審級において認められることばや身振り、あり方においてしか、その語りは聞き届けられない。すなわちそうしたあり方でしか、何者も存在することはできないのである<sup>47</sup>。

売春婦対策、ガヴァネスの物語の双方において、語ることの不可能性は、他者による過剰な語りと意味づけを伴っている。売春婦についての道徳的、社会的位置づけや救済の根拠、方法といった一連の言説群や、既存のガヴァネスのイメージに沿った編集や多数の書評の存在は、そのことを示している。これらは、第三者の審級において、誰がどのようなあり方を認められるのか、ということについて繰り返し語るものである。

これらの言説群が及ぼす作用とは何か。本稿Ⅱ節で取り上げた売春婦対策に関する史料のほとんどは、売春婦をめぐる過剰な語りである。その語りは、「まっとうな」女性というカテゴリーの周縁（マージン）を決定していく。何が「まっとうな」女性とそうでない女性を分けるのか、「まっとうな」女性とは誰で、そうでない女性とは、何をもってしてそのように決定されるのか、売春婦はどこまで「まっとうな」女性に戻れるのか、といった問題が、そこでは議論される。このとき、マージナルな者とは、あらかじめ決定されている不遇な者なのではなく、主語＝主体の語りが不可能であると同時に、マージナルな者としてのあり方をめぐる語りが

付与されることで造られていく者である。

ここで起こっていることは、売春婦をマージナルな者として配置することと、同時に、それによる「まっとうな」女性というカテゴリーの決定である。売春婦の教育と更生の政策は、売春婦を他の女の外部に位置づけるのではなく、周縁に置く。売春婦は、「まっとうな」女性と無縁の世界に位置づけるのではなく、ある種の連続性をもって、すなわち「まっとうな」女性からいつでも転落し得るし、またそこから更生することも可能であるというかたちで位置づけられる。更生可能性という考え方は、更生という価値を伴う。その価値は、予防と見通しと教育を通して、女たちを絶えず分類し、規範化するのである。

この規範化の運動は、「女のなかの差異」を生み出す。ある女と別の女について、差異を指摘し、根拠をつくり、当事者の語りが存在しない次元で、彼／女たちについて意味づけていく暴力。ある者をマージナルな者として位置づけ、ある者をそうでない者としての規範へと囲い込み、さらにある者を規範のマージンの外側へと追いやり不可視化する暴力。それは、一度の作用に終わるのではなく、新しい、あるいは既存の秩序空間を強化する言説の絶えざる増殖によって行なわれる。

あるガヴァネスが普通の中産階級女性として生活したという証言は、彼女の不幸が中産階級女性全体の不幸であったことを顕わにする。しかし、ガヴァネスについての言説は、多くの場合、本稿Ⅲ節で見た書評群のように、それを聞き取らず、証言として成立させない。なぜなら、ガヴァネスについて語るということは、ガヴァネスと他の人々との差異を語るということによって、容易に価値づけられるからである。こうしたことは、ガヴァネス史研究においても無自覚に起こり得る。あるいは売春婦の被る言説的暴力も、それについて語るためには、私たちは再び、その同じ暴力を指し示すことばをもって語るしかない。差異は、規範化の暴力においてのみならず、私たちにおいても、生み

出され続けるのである。

語ることばを持たない売春婦も、自ら語るガヴァネスも、表象を呼び込む、表象の欲望の対象たる「他者」である。この他者性は、女であることと同値ではなく、語りにおいて誰にも起こり得る問題であるが、しかし女であることによって、容易に起こり得る問題でもある。なぜなら、女たち、少なくとも本稿でとりあげた女たちは、ことばを奪われることに対して、それを奪回する主体として組織される機会がほとんど見出せないからである。こうした見方は、奪回の主体となり得た売春婦やガヴァネスを、そうでない物語、すなわち暴力を被るだけの沈黙する女たちの物語へと回収するものだという批判は、免れ得ない。

本稿を通じて筆者たちが問題としたのは、主体を想定されつつも主体として行動し得ない状況を、どのように捉え得るかということであった。それは、語る、あるいは語られることをめぐる一連の暴力の存在を指し示すことであった。彼女たちの被った言説的暴力のあり様を書きつける私たちもまた、表象の暴力からは自由ではない。それでもなお、暴力の存在を指し示す他者のことばを証言として成立させるには、私たちは、私たちも表象の暴力から自由ではないということを自覚しながら、表象が成立するただ中に分け入る以外にはないのである。

#### 註

- 1 たとえばベルント・レック『歴史のアウトサイダー』昭和堂2001
- 2 荻野美穂「歴史学における構築主義」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房2001, 146頁
- 3 おそらくは男性を中心とした「社会的周縁性」を描く歴史においては、たとえば安丸良夫が述べているように、画一性を志向する構造化された秩序に対して、それが抑圧しているものをコンフォーミズムの手から奪取することが目指される（安丸良夫『一揆・監獄・コスモロジー—周縁性の歴史学—』朝日新聞社1999, 20頁）。女性の歴史を描く場合、抑圧されてきた女性という

- ものをあらかじめ想定し、単層的な歴史に裂断面を入れようとするのが、逆に既存の秩序を強化してしまうということが起こり得る。むしろ本稿は、「抑圧されてきた女性」などという表象が、どのような語りの中でいかにして作られるかということを見ようとするものである。
- 4 竹村和子「フェミニズムとポストコロニアリズム」姜尚中編『ポストコロニアリズム』作品社2001, 44-45頁
  - 5 Bell, S., *Reading, Writing and Rewriting the Prostitute Body*, Indiana U.P., 1994, p.2, 山本民雄ほか訳『売春という思想』青弓社2001, 12頁
  - 6 秋山麻実「19世紀イギリス「ガヴァネス問題」の再考-母との葛藤と近代家族の純化-」日本教育学会『教育学研究』第67巻第2号2000参照。「間隙を生きる」という概念は、ポストコロニアリズムの思想におけるものである。ポストコロニアリズムの思想を19世紀のイギリス女性の分析に横滑りさせることの危険を承知した上で、ここでこのように用いるのは、それが性支配と植民地支配を問題にすると同時に、そうした支配構造を語る「語り口」がまた支配構造を強化していることをも問題にする議論だからである。そのような視点に本稿も大いに刺激を受けている。
  - 7 Henderson, T., *Disorderly Women in Eighteenth-Century London : Prostitution and Control in the Metropolis, 1730-1830*, Longman, 1999, p.88, 売春婦を主たるターゲットとした風紀改善協会(The society of the reformation of manners)も、治安判事への通報を行って社会全体の風紀を改善しようとしただけであり、個々の売春婦の矯正は問題にされてはいなかった(Hunt, A., *Governing Morals : A Social History of Moral Regulation*, Cambridge U.P., p.32)。
  - 8 Porter, R., *Enlightenment : Britain and the Creation of the Modern World*, Allen Lane the Penguin Press, 2000, p.373, マグダリン・ホスピタルを設立したハンウェイは、捨て子養育院であるファウンドリング・ホスピタルや、孤児などを海軍へ送り込むマリン・ソサイアティの運営にも深く関わっていた。社会的逸脱者の問題は、子どもの社会化と密接に関わりながら浮上してきたと言えよう。ファウンドリング・ホスピタルについては、山口真里「18世紀イングランドの捨て子処遇における「家族」と「教育」-ファウンドリング・ホスピタルからハンウェイ法へ-」教育史学会『日本の教育史学』第43集2000参照。
  - 9 この点については, Silver, H., *The Concept of Popular Education : A Study of Ideas and Social Movements in the Early Nineteenth Century*, Macgibbon & Kee, 1965, Chap.1参照。
  - 10 岡真理は、第三世界の女性の人権を擁護するかに見える「西洋フェミニズム」の、例えば性器切除批判言説が、第三世界女性の声を篡奪し、結局は西洋植民地主義的支配に加担していることを繰り返し指摘している(岡真理『彼女の「正しい」名前とは何か-第三世界フェミニズムの思想-』青土社2000)。
  - 11 Spivak, G.C., Can the Subaltern Speak? , in ; Nelson, C. & Grossberg, L. ed., *Marxism and the Interpretation of Culture*, University of Illinois Press, 1988, p.276, 上村忠男訳『サバルタンは語ることができるか』みすず書房1998, 18頁
  - 12 Derrida, J., *De la grammatologie*, Minuit, 1967, 『根源の彼方に-グラマトロジーについて-』現代思潮社1972
  - 13 大澤真幸「語ることの(不)可能性」『現代思想』vol.24-5, 1996, 300頁
  - 14 「「サバルタン」とは、自らが被っているその苦難が、この言説的暴力を被ることなくしては表象されえない者たちに与えられた名である」という岡真理の指摘も、同様のことを述べていると言えよう(岡 前掲書 29頁)。
  - 15 Spivak, *op.cit.*, p.285, 44頁
  - 16 このようなパラドキシカルな構造は、「中間者としての教師」(佐藤学『教師というアポリアー反省の実践へ-』世織書房1997)の語りに典型的に見られると言えるかもしれない。教師についても、教師自身の「語らなさ」と外部における過剰な語りがこれまで指摘されてきた(佐藤同上書 4 頁, Gardner, P., *Reconstructing the Classroom Teacher, 1903-1945*, in ; Grosvernor, I., Lawn, M., Rousmaniere, K., ed, *Silences & Images : The Social History of the Classroom*, Peter Lang Pub., 1999, p.126, Rousmaniere, K., *City Teachers : Teaching and School Reform in Historical Perspective*, Teachers College Press, 1997, p.2)。しかし、教師は「語



らない」のではなく、自らの同一性を肯定的に言及するはずの「(教育的な) 語り」それ自体によって自らが否定的に言及されてしまうようなパラドクスを生きてしまっているのではないか。

- 17 この点については、秋山麻実「『教える女性』の歴史へ向けて—女性教員史研究についての一考察—」大人と子供の関係史研究会『大人と子供の関係史第四論集』2001参照。
- 18 Scott, J.W., *Gender and the Politics of History*, Colombia U.P., 荻野美穂訳『ジェンダーと歴史学』平凡社1992, 85頁
- 19 An Authentic Narrative of a Magdalen, *An Account of the Rise, Progress, and Present State of the Magdalen Charity*, 5th ed. W. Faden, 1776
- 20 *Ibid.*, p.34.ここで史料として使用する『マグダリン・ホスピタル小史』は、1776年に出版された第5版である。確認できた限りでは、この物語は、1766年の第3版には掲載されていない。
- 21 村上直之『近代ジャーナリズムの誕生—イギリス犯罪報道の社会史から—』岩波書店1995, 第三章第三節
- 22 An Authentic Narrative, p.34
- 23 Dingley, R., *Proposals for Establishing a Public Place of Reception for Penitent Prostitutes*, W. Faden, 1758, p.3
- 24 リン・ハント編著(正岡和恵, 末廣幹, 吉原ゆかり訳)『ポルノグラフィの発明: 猥褻と近代の起源, 一五〇〇年から一八〇〇年へ』ありな書房2002, 237-238頁
- 25 Hanway, J., *Letter V to Robert Dingley Esq. Containing Moral and Political Reasons for Relieving Prostitutes Who Are Inclined to Forsake Their Evil Course of Life*, J.Dodsley, 1758, p.5
- 26 *Ibid.*, p.5
- 27 Lloyd, S., 'Pleasure's Golden Bait': Poverty and the Magdalen Hospital in Eighteenth-century London, *History Workshop Journal*, 41, 1996, p.56
- 28 たとえば, A Sermon, Preached at the Chapel of the Magdalen—House, before His Royal Highness Prince Edward, by William Dodd, M. A., *An Account of the Rise, Progress, and Present State of the Magdalen Charity*, 5th ed., W. Faden, 1776
- 29 *Ibid.*, p.327.
- 30 ショシャナ・フェルマンは、「トラウマ」という概念について、次のようにいう。トラウマの証言は、トラウマの存在を指し示すけれども、それについて意識をもち、説明することはできない。それゆえに、何が起こったのかということを取り戻すということは、女性たちによる証言の分有、すなわち、証言を聞き、失われた記憶を取り戻す作業をともにすることによって達成される(ショシャナ・フェルマン『女が読むとき女が書くとき—自伝的新フェミニズム批評—』勁草書房1998, 23-30頁)。このトラウマの証言という考え方を援用するならば、本稿は、過去の暴力がどのようなものであったかということを取り取る役割を果たそうとしているといえるのではないだろうか。
- 31 このことばは、秋山がヨーク大学のT. ブロートン教授にインタビューする機会を得た際に、示唆されたものである。ガヴァネスになることが、結婚できないミドルクラス女性ならば誰にでも降りかかるかもしれない運命だったということとともに、ガヴァネスとして働く場合に起こり得る立場の微妙さは、ヴィクトリア期のジェンダーの問題全体に関わるものであったということも意味する(前掲秋山論文2000)。しかし、ここで問題にすべきは、「ガヴァネス」として分節化された女性たちは、実は普通のミドルクラス女性であった可能性である。「ガヴァネス」もまた普通のミドルクラス女性の生活のなかにあるということ、その生活自体が「ガヴァネス」と同様の問題を孕んでいたということは、悲劇をガヴァネスに集約することによって隠蔽されるのである。
- 32 Hall, E., ed., *Miss Weeton's Journal of a Governess*, Vol.1, 2, 1936, 1939. ただし、本論文執筆にあたっては、Bagley, J.によるイントロダクションが付加された1969年版を参照している。
- 33 *Past Forward*, 8, 1994, p.5
- 34 Hall, E., ed., *op.cit.*, Vol.1, 1969, p.3
- 35 *Ibid.*, Vol.2, p.135
- 36 *Past Forward*, 10, 1995, p.2
- 37 Hall, *op.cit.*, p.23
- 38 そのため、この本が出版されたとき、その社会史の史料としての価値が指摘されている(Three Victorian Volumes, in *Life and Letters Today*,

- 1937, Hall, E., *Cutting Book Relating to the Publication of 'Miss Weeton, Journal of a Governess.'* p.51)。
- 39 *Ibid.*, Introduction.
- 40 ただし、第一巻、および第二巻のうちの他の部分の編集の仕方からみれば、ホールがエレンのノートからかけ離れた物語を創造したと考えるのは、公平ではないといえるだろう。
- 41 書評は、Hall, E., *Cutting Book Relating to the Publication of 'Miss Weeton, Journal of a Governess'*としてまとめられ、ウィガン古文書館に寄贈されている。
- 42 Heyward, J., *Poor Nelly Weeton: The Tribulations of an Obscure Governess, Observer*, 1937. Feb.28th, *Ibid.*, p.43
- 43 Hawley, M., *Poke Bonnet Adventures, Everybody's*, 1954. April.24th, p.17, *Ibid.*
- 44 *The Victorian Volumes, Life and Letters Today*, 1937, *Ibid.*, p.50
- 45 ポスト・コロニアリズムの視点から、ヴィクトリア期のカヴァネスの語る主体について論じたものに、正木恒夫「帝国の中の『ジェーン・エア』—ジェーンの主体と非ヨーロッパ的他者—」(『思想』第897号, 1999)がある。正木は、ジェーンの主体が、植民地を外部へと追いやられ、それとの比較を通して構築される種類のものではあったことを指摘している。偶然ながら、エレンの人生もまた、時代は少し遡るけれども、奴隷船かつ武装貿易船の船長の父という条件のもとに成り立っていた。彼女が、英国内部のミドルクラス女性らしい生き方を求める権利を有するのは、この父の身分によるものであるが、同時に彼女の日記は、その求める立場がいかにもろく、脅かされやすいものであったかということを示している。書く主体としての彼女は、時に隠され、世間に認識されないそれであった。
- 46 Hall, ed., *op.cit.*, Vol.1, p.3, pp.125-6, p.132
- 47 スピヴァクは「サバルタンは語ることができるか」の出版より後に、サバルタンの語りが可能であるということは、必死で語ろうとしても聞き取ってもらえないということである、としている。「サバルタン・トーク」『現代思想』Vol. 27-8, 1999